

かわらばん



大学生はアクティブ・ラーニングが嫌いなのか？

大学生の主體的な学びを促すために、多くの大学がさまざまな試行錯誤を重ねています。果たして、そうした試みは大学生の心に響いているでしょうか。もしかすると、教職員と学生の間には、学習に関して認識上のギャップが何かしら存在するのかもしれない。以下、詳しくご紹介します。

ベネッセ教育研究開発センターが2012年11月に全国の大学生4911人に対して実施した『第2回大学生の学習・生活実態調査報告書』からは、いろいろおもしろい結果が読み取れます。2008年に実施した第1回調査結果と比較すると、グループワーク、プレゼンテーション、ディスカッション、体験型活動などを行う授業が着実に増えており、授業内容に関するコメントや意見を述べる機会も増えているようです。中央教育審議会答申で強調されているような「アクティブ・ラーニング」の要素を取り入れた授業は全国の大学で増えており、大学は昔よりも学生に対して確実に

「親切」になっているようです。ところが、大学に対する学生の満足度については、施設・設備、進路支援の体制、教員、授業・教育システムのいずれの項目においても低下しています。残念ながら大学側の親切さは必ずしも報われていません。また、「保護者のアドバイスや意見に従うことが多い」「困ったことがあると、保護者が助けてくれる」と回答する学生が増加しています。今日では大学教育に対する保護者の関心は大きくなり、入学式や卒業式に保護者が参列することは珍しくありませんが、同時に学生の側も保護者の支援を必要としているようです。

これに呼応するように大学生の学習観にも変化がおきています。すなわち、「あまり興味が無くても、単位を楽にとれる授業がよい」「大学での学習の方法は、大学の授業で指導をうけるのがよい」と考える学生が増加しています。際立っているのは、「学生生活については、(学生)の自主性に任せるよりも(大学の教員が)指導・支援するほう

がよい」と回答した割合がわずか4年間でほぼ倍増(15.3%→30.0%)していることです。つまり、大学生は自分が試行錯誤して学ぶよりも、基本的なことを教員が手取り足取り教えてくれる方を望むようになりつつあります。

さらに、こうした学生の認識と教員側の認識には一定のギャップが存在します。同様の質問項目で、山田剛史らは大学教員向けに調査(2013)を実施しています。両調査を比較すると、「学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多いほうがよい」とする考え方について、大学教員の69.4%が賛成しているのに対して、上記のベネッセ大学生調査では16.7%が賛成しているにすぎません。教員が知識・技術を教える講義形式の授業を好む学生が圧倒的多数を占めているのです。

消極的になっているのでしょうか。大学教育に対する学生の満足度はなぜ低下しているのでしょうか。詳細な分析はできていませんが、いくつかの仮説が考えられます。第一の仮説は、大学側の取り組みや学生に対する介入は、彼らの内発的な動機づけを高めるのにまだまだ十分ではないという解釈です。この仮説に基づけば、現代の多様化・大衆化した大学生のニーズにより合致した教授技法やカリキュラム、学習支援が必要だということになります。実際に、多くの大学がこうしたアプローチをとっています。

逆に第二の仮説は、学生の自発性や自主性を高めるために大学や教員が学生に介入すればするほど、学生はその介入を自然のことと受け止めてしまい、かえって依存度を深めてしまうのではないかという解釈です。この仮説に基づけば、大学はほどほどに不親切で、快適すぎない方が学生の自立にとって望ましいのかもしれない。大学があまりに親身で快適すぎると逆効果となり、学生は社会の荒波に適応できなくなるかもしれません。

かわらばんへの皆さまの「意見・ご感想をお寄せください」
Eメールアドレス info@cshe.nagoya-u.ac.jp

FD・SD教育改善支援拠点事業「ポートフォリオが学習支援に活用されるための条件」を開催

2013年11月8日(金)、FD・SD教育改善支援拠点事業「ポートフォリオが学習支援に活用されるための条件」を、名古屋大学東山キャンパス豊田講堂第一会議室で開催しました。全国の大学から教職員54名が参加しました。



学生の学習の過程や成果を電子的に記録するポートフォリオのシステムを導入する大学が増えています。しかし、残念ながら学習支援に効果的に活用されていない事例もみられます。このセミナーでは、ポートフォリオが学習支援に効果的に活用されるための工夫と課題を共有することを目的としました。

金沢工業大学の藤本元啓氏による基調講演の後、「ポートフォリオの実践の知恵と課題」というテーマで東京学芸大学の森本康彦氏、中部学院大学短期大学部の伊藤龍仁氏、法政大学の宮崎誠氏による事例紹介がありました。最後に、「ポートフォリオが学習支援に活用されるための工夫」というテーマでパネルディスカッションが行われました。

登壇者からは大学におけるポートフォリオの活用の課題も指摘されましたが、同時にさまざまな工夫も紹介されました。ポートフォリオの目的を絞った運用、既存のシステムを活用した運用、必修科目の授業との連携、希望ゼミへの応募の自己PRとの連動、就職活動のエントリーシートの指導との連動、ポートフォリオによって学習の習慣づけができ2年生以降の学習に大きく影響を与えていることの紹介、就職活動でポートフォリオが活用された事例の紹介などが工夫として挙げられました。(中井俊樹)

点になると考えます。(近田政博)
参考文献
ベネッセ教育研究開発センター「第2回 大学生の学習・生活実態調査報告書」
<http://berd.benesse.jp/berd/>
center/open/report/daigaku_ittai/2012/hon/ (2013年11月23日閲覧)・山田剛史「大学教員の教授・学習に関する認知・行動・成果の関連」大学教育学会2013年度課題研究会シンポジウム発表資料、2013年12月1日

ヨーロッパの大学は、MOOCをどうに見ているか

Higher Education Glossary

高等教育にまつわる用語集

反転授業 Flipped Classroom

近年注目を集めている学習形態のひとつに、「反転授業」があります。従来、学生は教員による講義によって知識を伝授され、授業外では必要な知識の確認のための予習や伝授された知識を定着させるための復習を行うことで知識の定着を図る、というスタイルが一般的でした。反転授業において「反転」(flip)するのは、教室内・外で行う学習です。学生たちは、動画教材によって「教室外」で知識伝授型・説明型の講義を事前に受講します。「教室内」で行うのは、事前に受講してきた知識を習得・活用するための発展的な学習活動です。

反転授業は、通信技術、ICT技術の向上によって普及してきたeラーニングのなかでも、オンラインによる学習と対面式学習を組み合わせたブレンド型学習(Blended Learning)と呼ばれるものの一種です。反転授業によって効率的な学習効果を得るためには、オンライン教材が充実していること、カリキュラム全体におけるオンライン教材の位置づけや対面式授業で取り入れる学習活動や指導のあり方を明確にすることなどが求められます。ICT大規模公開オンライン講座(MOOC、Massive Open Online Course)、カリキュラム、アクティブ・ラーニング、学修時間など、近年の大学改革・教育改革にとって重要なトピックを、反転授業という学習形態に関わる問題として取り上げることができるでしょう。

反転授業という学習スタイルには、確かに新しさや可能性を感じます。反面、授業時間外での知識獲得を前提とした授業づくり、学修時間の確保がどこまで可能なのか、といった疑問も残ります。「反転授業」をさらに「反転」させる「反・反転授業」がスタンフォード大学の研究チームによって提案されるなど、反転授業に関して、あるいは学習形態の多様化、最適化について、これからも活発な議論が行われていきそうです。(東望歩)

大学の講義の動画や資料を無償で提供する公開オンライン教育(MOOC(ムーク))について、本紙2013年夏号で紹介しました。登録すれば誰でも受講でき、試験を経て一定の水準に達すれば修了証を取得できるシステムです。無償で一流大学の講義が受講できるため、受講者は世界的規模で拡大しており、優秀な学生や人材を求める戦略として、大学や企業が積極的に活用するようになっていきます。ヨーロッパの大学はムークをどのように見ているのでしょうか。2013年1月に、ヨーロッパ大学連盟(EUA)が、ムークについて報告書を発表しました。全16ページとごく短いものですが、そこではアメリカ発の取り組みに対する関心と同時に、危機感

もうかがわれます。まず、ムークで提供される授業の特徴として、①多様な講義・教科書・練習問題等で構成されていること、②学生は自分のペースで学習できること、③教員と学生間や学生同士での相互作用が可能であり、学生同士で練習問題の評価を行えることなどをあげています。そのうえで、「ムークは学習革命をもたらすものなのか、それとも新ビジネスなのか」との問題提起に対して、以下のように指摘しています。(1)参加教員は革新的な学習や学生との関わり合いに熱心だが、知識の創造よりも再生産にとどまり、教授方法も講義という伝統的スタイルのままである。(2)2000年代に別組織が類似の取組を行っており、新しさに

欠ける(同取組は不成功に終わった)。(3)にもかかわらずムークが注目されるのは、世界的な研究大学が参入しているためである(ただし、これらの大学の教育力が優れている保証はない)。アメリカ以外に普及していないことを指摘し、ヨーロッパで普及するかどうかは高等教育財源や使用言語にかかっていると述べています。アメリカでの普及は高等教育コストの膨張を防ぐ狙いがありますが、公財政に依存する国でコスト削減動機が強まるかどうか疑問視しています。英語だけでなく他言語がどの程度使用されるかも重要と指摘しています。

さらに、今後の見通しとして、ムークの普及が正規学生(運営は彼らの授業料による)を減らすことになればムークの運営自体が困難になること、賛同企業の興味も持続できるかどうか疑問であること、大学執行部はムークの将来について必ずしも明るい展望をもっていないことなどをあげています。ムークが配信する講義は英語で行われるため、日本の大学が参加するには難しい面があります。大学や企業が共同で、一般社団法人「日本オープンオンライン教育推進協議会」を2013年11月に発足させました。日本国内での普及や諸外国への日本語による発信を目指しています。これを契機にムークの動きが日本でも本格化すれば、既存の大学教育に少なからぬ影響を与えられる可能性があります。そのようにみると、EUA報告書の内容は示唆に富んでいます。(夏目達也)

読んでおきたい

この1冊

Great Books on University

『科学者が人間であること』

中村桂子 著 岩波新書 2013年8月

何とも食指を伸ばしたくなる本書のタイトルである。東日本大震災が科学・技術のあり方に様々な疑問を突きつけたことは記憶に新しい。生命科学者であり、現在、JT生命誌研究館館長である著者は、大震災から2年以上経過した今も科学者は大震災前と何ら変わっていないと断じ、本書において、近代科学文明、科学、科学技術そして科学者のあり方を問い直している。

ガリレイ、ニュートンに始まり、還元性・普遍性・決定論を特徴とする方法論と自然観を駆使し、19世紀を「科学の世紀」、20世紀を「科学技術の世紀」と呼ばせ、我々の社会生活を大きく変革させた近代科学、そして世界中に広まった機械的世界観。科学や科学技術の対象はすべて数値化され、科学や技術の対象が日常生活から益々かけ離れ、自然の中に生きる一人の人間としての視点が忘れ去られていく。

著者は、大森荘蔵の言葉を借りて「活きた自然が『死物化』している」と表し、「皆が健康に幸せにいきいき暮らすにはどんな科学、科学技術が必要か?」と問題提起する。そして、著者の主張は生命論的世界観と機械的世界観の調和、密画的世界観と略画的世界観の「重ね描き」と続く。

生命科学からの多彩な知見、例示がおもしろい。「便利さは、速くできること、手が抜けること、思い通りになることだが、生きものとしての特徴と合わない。なぜなら、生きるとは時間を紡ぐことであり、時間を飛ばすことは生きることの否定になる。」といった件は工学に身をおく者には耳の痛い見識である。21世紀は「人間の世紀」とも言われる。本書を手にして、今一度、科学、科学技術、そして科学者、技術者のあり方を考えてみたい。(早川義一)

高等教育研究センタースタッフ(2014年1月現在)

Table with staff information including roles (Director, Professor, etc.), names, and contact details for Nagoya University Center for Higher Education Research.